台大日本語文研究第 5 期
2003 年 12 月，頁 191～214

貞女再嫁的引用創造－大和物語初段的虛構方法－

齋藤正志*

摘　要

由一百七十三章的短篇物語組構而成的『大和物語』，在日本古典文學的領域中，是屬於平安王朝物語的文學。此物語的第一段也就是所謂的初段，係由第五十九代之宇多天皇與他的「召人」（＝愛人，當時伊勢擔任皇后的仕女）伊勢這位女性歌人與天皇之間的吟詠對唱所構成。在這篇物語中可以得知，伊勢感嘆地詠唱出與宇多天皇離別之和歌後，宇多天皇則是以詠唱出要求伊勢繼續擔任宮廷中仕女的和歌，來回應她。但是宇多天皇的要求，並非只是單純的要伊勢恢復宮廷的職位，而是要求伊勢以宇多天皇的親生兒子，即第六十代之醍醐天皇的「召人」（＝愛人）身分再度出仕。

以上的物語不禁讓人連想到（換言之），漢代「王昭君」的人生也是充滿悲劇。她那悲劇性經驗的過程，在『漢書』的「匈奴傳」中，記載的特別詳細。傳中的史事，曾提及「王昭君」雖然下嫁給匈奴王，但是在匈奴王死後，則又不得不再度下嫁於她的親生兒子。

因此由上述可知，我們可以將王昭君的悲劇，當作前述的伊勢之物語的暗示引用。而我們必須要知道的是，雖然形成兩者的話題是著眼於「貞女再嫁」，但是因爲史實上，伊勢並沒有成爲醍醐天皇的「召人」（＝愛人），所以，事實上『大和物語』的初段是虛構而成的。

* 中國文化大學日本語文學系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

也就是說，本稿是在理解大和物語初段及從結果來看，伊勢最後並沒有「再嫁」之事實爲前提，來解讀「貞女在嫁」這話題中伊勢的悲劇，並且論述『大和物語』的虛構方法，以及以暗示引用作爲依據的創造方式。

關鍵詞：貞女再嫁、暗示引用、王昭君引用、引用創造、虛構方法

臺灣大學學術期刊資料庫

The creative method of allusion on the remarrid virtuous woman~The method of fiction on the 1st chapter in“ Yamato-Monogatari”~

Masashi Saito*

Abstract

“Yamato-Monogatari” belongs to a narratives of Japanese classics in the Heian period. This text consists of little stories, 173 chapters. The 1st chapter in “Yamato-Monogatari” is a story of the abdicated 59th Emperor Uda and Ise, Ise was a poetess and a private servant of Uda’s Empress and Uda’s sweetheart. I interpreted the story as Ise’s poem for reluctant to part from Uda and Uda’s poem for request to her re-employment in Heian Court, but really, his request was a change of his son’s sweetheart, his son who became new Emperor, the 60th Emperor Daigo.

By the way, the life of ”Wang Zhao-jun” in the Han dynasty was full of tragedy. Especially, her tragedy of “the story of Xiong-nu” in “Han-shu” was lost her husband who was King of Xiong-nu, and remarrid his son who became new King of Xiong-nu.

Now, I regard the 1st chapter in “Yamato-Monogatari” as the allusion of the tragedy of “Wang Zhao-jun”. I regard these stories as a tale-type of “the remarrid virtuous woman”. But really, Ise didn’t change of Daigo’s sweetheart in the histrical

臺灣大學學術期刊資料庫

* Associate Professor,Department of Japanese Language and Literature, Chinese Culture University

fact. So that, the 1st chapter in “Yamato-Monogatari” is a fiction. In brief, its narrative made from the creative method of allusion and the method of fiction.

Keywords:the remarrid virtuous woman, allusion,
allusion of ”Wang Zhao-jun”,
the creative method of allusion, the method of fiction

臺灣大學學術期刊資料庫

貞女再嫁の引用創造—大和初段における虚構方法—

齋藤正志*

摘　要

百七十三章段の小話から成り立つ『大和物語』は、平安時代の日本古典文学の中で物語文学に属する。その第一段すなわち初段は、第五十九代・宇多天皇の皇后の女房で天皇の「召人」(＝愛人)であった女流歌人・伊勢と天皇との二人の詠んだ和歌で構成されている。そこでは、伊勢が宇多天皇との離別を嘆く和歌を詠むのに対して、天皇は宮廷への再度の出仕(＝勤務)を求める和歌を詠んでいると解釈できる。しかし、その要求は、単なる宮廷への職場復帰ではなく、天皇の実子の第六十代・醍醐天皇への「召人」としての再出仕であった。

ところで、漢代の「王昭君」の人生は悲劇に満ちていた。特に、彼女の体験した悲劇は、『漢書』の「匈奴伝」に詳しい。そこでは、匈奴王に嫁ぎながら、その夫の死後、今度は夫の実子に再び嫁がざるを得なかった史実が語られている。

さて、この王昭君の悲劇は、前述の伊勢の物語に暗示引用されたと考えられる。ここにおいて、両者は、「貞女再嫁」という話型を形成すると見なされる。しかし、史実における伊勢は醍醐天皇の「召人」には成らなかったので、『大和物語』の初段は、実は虚構なのである。

つまり、本稿は、「貞女再嫁」という話型で伊勢の悲劇を読み解きながらも、結果的に伊勢が「再嫁」しなかった事実を背景にして大和初段を理解することによって、その虚構の方法

* 中国文化大学日本語文学系助教授

臺灣大學學術期刊資料庫

と暗示引用に基づく創造の方法とについて論じたのである。

キーワード：貞女再嫁、暗示引用、王昭君引用、引用創造、
虚構方法

臺灣大學學術
期刊資料庫

貞女再嫁の引用創造—大和初段における虚構方法—

齋藤正志

一、

日本文学の研究方法の一種に「暗示引用」という方法がある。暗示引用とは、allusion というレトリック用語の日本語訳である。文学（表現）研究の「引用」という術語概念には、もう一つ quotation があり、これは、いわゆる地の文（小説・物語等の叙述・説明の文及び文章）の中に手紙・会話文・心中思惟などを引用符で挿入したり、自己の文章中に他人の発言・他文献等を quotation mark を用いて区別したりした時の表現のことで、日本語では特別な術語ではない、いわば普通名詞として「引用」と訳されている。

これに対して、allusion は、例えば、佐藤（1996,1992）所引の『プリンストン・詩と詩学の事典』で、「ほかの文学作品、ほかの芸術、歴史、同時代の話題などへの暗黙の参照［言及］」であり、単なる「原資料の借用」でないのは、十分に「理解し鑑賞するためには元のものに親しんでいることが読者に要求されるから」であり、また、単なる「参照［言及］」でもないのは、「暗黙のもので」且つ「前後の文脈のなかに溶け込んでいるから」だと説かれるような方法なのである[1]。

ところで、本稿表題の「引用創造」とは、暗示引用（allusion）に基づく創作方法（creative method）のことだが、これは、或るテクスト（text）の或る文脈（context）において或る前

---

[1] 佐藤（1996,1992）：pp.260-261。なお、allusion の日本語での訳語には、「引語」（高田早苗『美辞学』）、「引喩」（坪内雄蔵「文のすがた」）などがあったそうだが、特に後者は宋代の陳騤による修辞書『文則』からの流用、また中国語「引喩」の語義は、quotation に該当するということである（佐藤（1996,1992）：pp.272-273 を私に要約）。

本文（pretext）を読み解くことによって、そこに新たな創造の可能性を発見（＝意味生成）するという研究方法である。そこで注意しておきたいのは、本稿では、前掲の『プリンストン・詩と詩学の事典』のような解説を前提としながらも、次の一点のみは支持しない、ということである。すなわち作者が読者に「元のものに親しんでいること」を要求するという立場については、不支持なのである。つまり、私見での暗示引用は、それを作者が要求するのではなく、読者自身が主体的に読み解くと考えるのである。

これは一体どういうことか、というと、本稿では、ジュリア・クリステヴァの理論を前提とすることを意味する。すなわち、「どのようなテクストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テクストはすべて、もうひとつの別なテクストの吸収と変形にほかならない」という考え方である[2]。以下、本稿の目的と関係するので、この考え方について若干の解説を施す。

クリステヴァ理論の前提となるロラン・バルトという学者の先行研究で生み出されたのが「テクスト（text）」という概念である。テクストとは、「一枚の布が縦糸と横糸の交錯によって織りだされるように」現われる「先行、同時代の諸テクストの引用の織物」であり、「読者」によって「意味が生産される動的な場」である。したがって、テクストは、「作者がつくりだした一義的な構築された世界」なのではなくて、「読者が読むことを通じて、記号表現と記号内容の新たな結合関係」が生じ、「絶え間のない意味生成が展開される」ことになる[3]。クリステヴァは、このテクストという概念に、ミハイル・バフチンの「対話理論」を結び付け、「意味生成が行われるテクスト空間の三つの次元」として、「書く主体、その受け手、外部の

[2] 小森（1995,1991）A：pp.7-8。
[3] 小森（1995,1991）A：pp.5-6。

臺灣大學學術期刊資料庫

テクスト」という「相互テクスト性（テクスト連関）」という理論を生み出すのである[4]。これが「間テクスト性」[5]（テクスト相互連関性：intertextuality（インターテクスチュアリティ）である。

つまり、第一に「書く主体」自体が「先行するテクスト、あるいは同時代のテクストの『受け手』であり、この『書く主体』が「先行・同時代の文学資料を読み取」って、「他の諸テクストに対する自らのテクストを通しての応答」[6]を行うという〈書く主体と外部のテクストとの対話〉が生じている。

第二に、「受け手」＝読者が「読者自身の記憶の中にある多様なジャンルの記憶と、いま読んでいるテクストを相互にかかわらせること」で「読者自身のテクストを織り」[7]上げるという〈受け手と外部のテクストとの対話〉が生じる。

第三に「文学テクストのなかへ歴史や社会をめぐる多様な情報が挿入されていると同時に、テクストが自らを歴史や社会の中に挿入していく」[8]という〈文学テクストと他の諸テクストとの対話〉が生じ、かくして、三者間のインターテクスチュアリティを読むことが必要になってくるのである。さらに、この理論は、テクストの表層と深層との関係まで問うことになる。それを私見で要約すれば、表層で読み取ることのできる表現には、深層の多種多様な要素が錯綜しているのであって、その中から一つの要素を抽出することによって、そこに新たな意味を発見することがテクスト論の意義だということである。

こうした考え方を前提として、暗示引用に基づく創作方法の一端を開陳しようというのが本稿の目的である。本稿で暗

[4] 小森（1995,1991）A：pp.7-8。
[5] 高橋（1995.1991）：p.169。
[6] 小森（1995,1991）A：p.8。
[7] 小森（1995,1991）A：p.8。
[8] 小森（1995,1991）A：p.8。

臺灣大學學術期刊資料庫

示引用を読み解くべきプレテクスト（pretext）として、中国古代の歴史書『漢書』の中の「匈奴伝」九十四・下の一節を挙げる。

（呼韓邪）單于自言願壻漢氏以自親。元帝以後宮良家子王牆字昭君賜單于。…中略…王昭君號寧胡閼氏、生一男伊屠智牙師、爲右日逐王。呼韓邪立二十八年、建始二年死。…中略…呼韓邪死、雕陶莫皐立、爲復株絫若鞮單于。…中略…復株絫單于復妻王昭君、生二女…下略[9]。

ここに語られている事実は、匈奴王の呼韓邪単于に嫁いで一子を儲けた王昭君が夫の死後に夫の子息に再び嫁ぎ、娘を二人産んだという内容である。日本での王昭君に関する明示的な引用（quotation）は、いわゆる勅撰三集に見られる[10]ので、平安時代初期には既に有名だったと思われる。そして、『漢書』以後、王昭君に関する話題が多彩な文学テクストを生み出し、その人間像も時とともに変貌していった[11]が、本稿では、前掲の『漢書』「匈奴伝」の記述だけに限定して、王昭君像の暗示引用を考えることとしたい。

二、

ところで、日本の古典文学の中で、平安時代の「歌物語」という分野は、明示的引用の研究ならば、若干の指摘を見られるものの、暗示引用の研究成果については実に乏しく、とりわけ『大和物語』では皆無に等しい。本稿は、その意味で新たな一石を投じることになると考えられる。そこで、『大和物語』の第一段（以下の論述では、大和初段と略称する）の全文を引用する。

亭子の帝、いまはおりゐさせたまひなむとするころ、弘

9 『漢書』「匈奴伝」九十四下：p.3803,pp.3806-3807。
10 上原（1994）：pp.30-31。
11 山田（1989）。

臺灣大學學術期刊資料庫

徽殿の壁に、伊勢の御の書きつけける、

わかるれどあひも惜しまぬももしきを見ざらむことのなにか悲しき

とありければ、帝、御覧じて、そのかたはらに書きつけさせたまうける、

身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりてもなどか見ざらむ

となむありける[12]。

文学（表現）研究では、文献学的な認定作業が不可欠であることは、言うまでもない。そこで、先ず、一文の認定という点について簡単に触れておくが、この引用では、依拠した資料（小学館刊「日本古典文学全集」版）の句読点をそのまま採用することをしていない。というのは、歌集などと同様に、助動詞「けり」の連体形に和歌が接続する形態となっていると考えられるからである。したがって、「書きつけける」と「書きつけさせたまうける」との句点を読点に改めたことを断っておく。すなわち、大和初段は、一文だけで構成された章段だということになるのである。

さて、校異本文という存在もまた、文献学的認定作業の一環であり、且つ表現（の分析と）理解という基礎的な作業において、古典研究に必須の資料であることは、間違いない[13]。そこで、次に、引用資料の依拠した「天福本」との目立った校異を指摘しておこう。「伊勢の御」が「ある人」になっている「御巫本」と「鈴鹿本」、「わかるれど」が「わするれど」となっている「大永本」、「惜しまぬ」が「思はぬ」になっている「大東急本」と「御巫本」と「鈴鹿本」、「ゆきめぐり」が「ゆ

[12] 高橋（1972）：p.269。
[13] 最近の研究成果では、大和初段に関する論考ではないけれども、工藤（2002）、及び、その先行研究である川村（2002）などで、こうした問題が提起されている。

臺灣大學學術期刊資料庫

きかへり」になっている「為衆本」と「大東急本」と「為家本」と「御巫本」と「鈴鹿本」、そして、「などか」が「いつか」になっている「勝命本」という各々の異文を確認することができるのだが、そもそも『大和物語』の場合、本多（1980）が底本とする「陽明文庫蔵本」以外の対校本文15本を多数決で考慮すると、異文を重視しない傾向にあるのも否定しがたい[14]。

また、大和初段の現代語訳を高橋（1972）[15]で挙げておく。

亭子の帝が、いよいよご譲位なさろうとするころ、弘徽殿の壁に伊勢の御が書きつけた歌に、

わたくしはここを別れていくのですが、いっこう名残りを惜しんでもくれないこの無心の宮中を、これから見なくなるということが、どうしてこんなに悲しく思われるのでしょうか。

とあったので、帝がご覧になって、そのかたわらにお書きつけになった、それに、

帝は、わたくし一人にかぎったことではないのだから、わたくしとおなじように思って、これからの帝に、つぎつぎに仕えれば、どうして宮中を見ることができないということがあろうか。

とあった。

三、

なお、関連資料として伊勢集の238－240番歌がある。

亭子のみかどの、おりさせたまはむとせさせ給ひし時の秋

白露のおきてかかれる百敷のうつろふ秋のことぞかなし

[14] 本多（1980）：pp.1-2。
[15] 高橋（1972）：p.269。但し、本稿引用では、「なった」の句点を読点に改めた。

臺灣大學學術期刊資料庫

き

わかるれどあひもおもはぬ百敷を見ざらんことのなにか悲しき

と、弘徽殿の壁にかきたるを、みかど御覧じてかたはらに

身一つにあらぬばかりぞおしなべてゆきかへりてもなどか見ざらん

大和初段に存在しない238番歌は、「白露が朝に置いてかかるそんな宮中の御代がわりの秋がひたすら悲しい」[16]と解釈され、他に初段と同様の設定で、『後撰集』巻十九「離別」の1322－1323番歌[17]がある。

亭子のみかどおりゐたまうける秋、弘徽殿のかべにかきつけける　伊勢

わかるれどあひもをしまぬももしきを見ざらん事やなにかかなしき

みかど御覧じて御返し

身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりてもなどかみざらん

また、『大鏡』には、

伊勢の君の、弘徽殿の壁に書き付けたうべりし歌こそは、そのかみに、『あはれなる事』と人申ししか。

別るれどあひも思はぬ百敷を見ざらむ事や何か悲しき

法皇の御返し、

身一つにあらぬばかりをおしなべて往き帰りてもなどか見ざらむ

と言へば、傍なる人、

「法皇の書かせたまへりけるを、延喜の、後に御覧じ付け

[16] 平野（1994）：p.52。
[17] 「新編国歌大観」編集委員会（1983）：p.62。

臺灣大學學術期刊資料庫

て、傍に書き付けさせたまへるとも承けたまはるは、いづれかまことならむ」

とあるが、「傍なる人」の話は、「誤写に基づく誤伝」であろう[18]。

四、

それでは、以上の資料を用いた表現理解の作業を進めていく。そもそも、『大和物語』は、天暦五（西暦 951）年－円融朝頃［安和二（969）―永観二（984）年］という成立説[19]もあるが、結局は、成立・作者ともに定説のない平安時代前期の物語文学作品で、いわゆる「歌物語」に属す。歌物語は、作中の和歌に主題を託していると考えられる。但し、一貫した主人公の登場する「伝奇物語」（或いは「作り物語」）と異なり、一人の人物の行動を語るものとは限らない。初期の歌物語である伊勢物語が「在原業平に擬せられる多感な『昔男』の、恋愛・流離・友情・別離など多岐にわたる内容を、和歌を中心に語っている」と説かれる[20]場合、そこに一貫した主人公像を想定することもできようが、平中物語に登場する「男」（第三十九段のみ「平中」という呼称が使われる）のように考えることも可能なので、私見では、必ずしも伊勢物語の主人公の一貫性を認めるべきではないと思われる。その点を考慮すると、歌物語の形成された目的は、登場人物の行動への興味にあるのではなく、作中の和歌にあることを認められるであろう。

大和物語も例外ではない。各章段が如何なる目的で形成されたか、を考える場合、その和歌に主題が託されていると考えることは、従来、歌物語と呼ばれてきたことによっても、

[18] 石川（1989）：pp.305-306。
[19] 高橋（1972）：p.254。
[20] 鈴木・他（1998）：p.137。

臺灣大學學術期刊資料庫

自然な解釈である。したがって、各章段を考察する場合、それぞれの和歌が解釈の中心となる。

第一首目の伊勢の御の和歌は、大和初段の諸本に下の句の異文は無いものの、『後撰集』は、「見ざらん事やなにかかなしき」（底本は、「定家年号本の天福二年三月本」の忠実な書写本の「日本大学総合図書館蔵の定家孫冷泉為相筆本」）となっており、係り結びを構成しているが、疑問の意に変わりはない。

しかし、上の句には、大和初段諸本に二種の異文が存する。

わかるれど—わするれど（大永）

あひも惜しまぬ—あひも思はぬ（大東急・御巫・鈴鹿）

第一種の東京教育大学蔵大永本の本文では、宮中を離れる伊勢の立場が明確にならないし、何を忘れるのか、その対象が不明であり、前掲の三種の関連資料にも同一の異文がないので、考慮の対象としなくてもよい。しかし、第二種の大東急記念文庫蔵本・天理大学付属図書館蔵御巫氏旧蔵本・鈴鹿三七氏旧蔵本の本文は、『伊勢集』（西本願寺本三十六人家集）と『大鏡』（東松本[21]）が同一の異文である[22]。また、平野（1994）は、「別れてもこちらほど嘆いてくれない宮中を見なくなることがどうしてこんなに悲しいのかしらん」と現代語訳し、「相思でない宮中を擬人化」と説く[23]。

原則として古文の解釈は、依拠した本文に従って試行されるべきだが、伊勢は、擬人化した宮中が別離の名残りを惜しまないということを嘆くか、相互に愛情を持たないことを嘆いているのか、どちらであっても、宮中の冷淡な態度を詰っていることに相違ない。したがって、ここに大きな解釈の相違はないものと断定する。それは、最新の注釈書と認められ

[21] 石川（1989）：p.6。
[22] 平野（1994）：p.52、石川（1989）：p.305。
[23] 平野（1994）：p.52。

臺灣大學學術期刊資料庫

る『大和物語評釈　上巻』でも同断である[24]。

第二首では、上の句の異文は特にないが、下の句には、これも二種の異文がある。

ゆきめぐり―ゆきかへり（為衆・大東急・為家・御巫・鈴鹿）

などか―いつか（勝命）

蓬左文庫蔵為衆筆本・大東急本・尊経閣蔵伝為家筆本・御巫本・鈴鹿本という五本で校異が認められる。為衆本・為家本は、「二条家本」だが、御巫本・愛媛大学図書館蔵鈴鹿本は、「六条家本」で系統が異なる[25]。また、直接の関連資料においても、それぞれ相違があり、確定しかねる。古語辞典に拠れば、「ゆきかへり」は、万葉集と源氏物語とを用例として、「同じ場所を行って帰る。往復する」とし、万葉集を用例に「行きつ戻りつする」または「年月など、古いものが去って、またあらたにやってくる」と説き、「ゆきめぐり」は、万葉集の用例で「めぐって行く」か、源氏物語の用例によって、「経めぐる」と説く[26]。大和物語は、源氏物語よりも推定成立年代は古いものの、書写年代の異なる各諸本の異文理解という観点から考えれば、源氏物語を用例としても構わないであろう。そこで、最新の注釈書である今井(1999)は、「前田家尊経閣本」、すなわち為家本を底本とし、「ゆきかへりて」で解釈し、語釈では、「(為氏本に)『ゆきめぐりても』とあるが、意味はさほど変るまい」と説き、通釈で「私一人にとっては、今まで通りではないというだけのことなのだから、そなたはこれからも同様に行き来して内裏を見ることがどうしてなかろう。(悲しむにはあたらないことだ)。」とする[27]。

---

[24] 今井（1999）：p.4。
[25] 今井（2000）：pp.502-504。
[26] 大野・他（1974）：p.1327,p.1328。
[27] 今井（1999）：p.Ⅴ,p.4。

臺灣大學學術期刊資料庫

五、

ところで、伊勢と宇多天皇との間には、皇子を儲けるような関係があった。伊勢が宇多天皇の女御だった藤原温子に仕えたのは、「伊勢の生没年は…中略…関根氏の推定にしたがえば元慶元年（八七七）生まれ、天慶初年（九三八―九四〇）没である。宮仕え時期を寛平四年（八九二）とすれば、温子の死が延喜七年（九〇七）」なので、16－31 歳くらいだったと推定できるようである[28]。藤原基経の娘だった温子は、宇多天皇との間に第一皇女・均子内親王を儲け、その譲位後に皇太夫人となった[29]。伊勢は、「歌人であるのみならず管絃の道にも秀でて」いると言われ、「箏の師弟関係を系図のかたちで示した『秦箏相承血脈』」で「醍醐天皇を受けて…中略…娘の中務・敦慶親王・左大将保忠と師弟の関係であることが示されている」という「伝承」もある[30]。そして、伊勢の存在意義は、「基経は、伊勢の父継蔭が伊勢守であった仁和三年から寛平三年の間、温子とはほぼ同年の伊勢を出仕させ、温子の客分として待遇した。それは摂関家の安全牌をひとつふやしたことになる」のだと説かれる[31]。さらに、今井（1999）は、「宇多天皇譲位は寛平九年（八九七）七月三日、三一歳のときで、『伊勢集』によれば、それ以前に伊勢との間には行明親王が生まれている」とする[32]が、本稿は、秋山（1994）の説くように、「藤原時平の娘褒子」を母とする「行明親王」を伊勢の子と認めず、「伊勢が産んだ皇子に関してはまったく不明」とするところに従う[33]。如上の伝記的な解説は、宇多天

---

28 秋山（1994）：p.28。
29 秋山（1994）：p.36。
30 秋山（1994）：p.38。
31 秋山（1994）：p.44。
32 今井（1999）：p.4。
33 秋山（1994）：pp.113-114。なお、伊勢の皇子については、秋山（1994）が紹介する岡崎知子氏の指摘する通り、『拾遺集』巻九「雑下」542

臺灣大學學術期刊資料庫

皇の返歌について考え、さらに初段を新しく解釈し直すためである。

六、

実は、従来、初段の宇多天皇の歌には、様々な解釈の歴史がある。古文解釈を明治時代に先立つ近世以前の注釈書で行うことを批判する学者もいるようだが、古文解釈の基礎作業に欠くことのできないのがいわゆる「古注釈書」の検討である。『大和物語』には、室町時代以降の成立と言われる『大和物語鈔』以後、幾つか注釈書が執筆されており、それを一覧する必要がある[34]。『大和物語鈔』では、宇多天皇の返歌に関する心情への言及しかないので、これに続く『大和物語拾穂抄』で、高橋（1972）など多くの注釈書が従う解釈が提示されるが、井上文雄による1853（嘉永6）年成立の『冠註大和物語』は、これまでのように宮中に住めないのは先の帝である私だけだ、という新しい解釈を掲げる[35]。この『冠註』の解釈に従う今井（1999）は、「従来通り禁中に住むことができないのは自分だけだ、あなたはこれまで同様に禁中に出入できる、の意味」だという[36]。

本稿は、この今井（1999）の解釈を前提とするが、帝の返歌の異文の問題も、北村季吟（『大和物語拾穂抄』）以来の解釈と井上文雄を継ぐ今井(1999)との対立する解釈の問題も、まだ解決されたわけではない。まだまだ再考を促すべき必要性を感じるところである。

さて、肝心な問題に移る。それは、今井（1999）が「上皇が再び出仕せよというのは、温子の女房としてではなく、新

番歌の詞書によって、存在を証明することができると思われる。

34 雨海（1983）。

35 雨海（1983）：pp.41-42。

36 今井（1999）：p.5。

臺灣大學學術期刊資料庫

帝に仕えよとの意味ととるほかなく、…中略…『次の帝に、自分と同様に仕えたらいい』とは…中略…男女関係を含めてのこと」と述べる点である[37]。この今井の見解は、重要な意味を持つと考えられる。何故なら、このように理解することによって、ここに読者の〈期待の地平〉[38]が生じるからである。〈期待の地平〉とは、「(ハンス・ロベルト・ヤウスによる)同時代の読者が作品を受容する際に作品に求める質的な基準のようなもの」である[39]。

大和物語は、従来、「歌語り」の集成と見なされ、その結果、史実との関係を重視して、解釈を進められてきたが、史実だけを重視するのも限界がある。

そこで考慮したいのが王昭君の悲劇なのである。今回は、『漢書』の「匈奴伝」だけに限定したが、これを王昭君の「貞女再嫁」という一種の話型と判断し、その暗示引用によって、初段を新たに読み解き直すことにするのである。今井(1999)を前提にすれば、亭子院こと宇多天皇が伊勢に求めているのは、自分以外の他の誰かに仕えるというだけの再出仕ではなくて、「召人」としての立場での再出仕なのだ、と解釈できないであろうか。

前掲の「匈奴伝」では、王昭君が呼韓邪単于の死後に単于の子の妻となった。単于の子といえども、王昭君所生の男子とは限らないだろうが、彼女の産んだ子息が夫となったが故に王昭君は、死を以って再嫁を拒んだという伝承も後世、生じている。いずれにしても、夫の死後、子に再嫁した事実を「匈奴伝」は、語っている。

以上の事実を知る読者は、伊勢が醍醐天皇の「召人」となる可能性を読み解くことができたのではないだろうか。勿論、

37 今井(1999):p.7。
38 小森(1995,1991)B:p.79。
39 島村(1995,1991):p.264。他に、高橋(1995,1991):p.171。

臺灣大學學術期刊資料庫

総ての読者が前述のような伝記的知識を持っていたとは言えまいが、平安宮廷王朝社会の閉鎖性は、読者の〈期待の地平〉を支えるだけの情報を齎したと考えることができると思われる。故に、王昭君引用[40]で解釈することも容易であろう。そして、この要請に伊勢が応じなかったことも読者は知っていたかもしれない。何故なら、伊勢は、その後、宇多天皇第四皇子・敦慶親王との間に、後に歌人として有名になった娘・中務を儲けたからである。

七、

日本古典文学において、平安時代の前期物語文学に属し、現存する「歌物語」として第二番目に成立年代を推定されている『大和物語』は、「歌物語」であるために、言うまでもなく、引用文である「和歌」に託された主題を中心として、地の文である「叙述文」とともに理解され、読み解かれるべき text（テクスト）である。

テクスト全編を理解するためには、古典研究の要諦というべき文献学的研究の一種である校異調査という作業を通じて、調査対象となる諸本を対照する必要がある。その結果、それぞれの異文、さらに異文に基づく別の解釈を、対象とするテクストに織り込みながら、読み解かれるべき最善のテクストを織り上げていく。こうして織り上げられたテクストは、伝記的な情報・暗黙の参照とすべき史実などという複数の pretext（プレテクスト）を吸収して、さらに新しく織り出されていくのである。

本稿で対象とした大和初段もまた、異文照合・別解対照によって、また、他文献の参照をも含めた最善のテクストへと織り上げられていき、そこに伊勢という女流歌人の生涯とい

[40] 王昭君（の明示的な）引用に関する最新の研究に、大和初段とは無関係ながら、齋藤（2002）がある。

臺灣大學學術期刊資料庫

う伝記的な情報を織り込み、さらに王昭君という漢代中国の悲劇的美女の史実をも織り込むことで、さらに新しいテクストが織り出されていった。

つまり、第五十九代天皇・宇多と女流歌人・伊勢との贈答という大和初段の物語は、「貞女再嫁」という漢代の悲劇を暗示引用することによって、新しい読み改めが可能になったのである。それは、宇多天皇が自分の退位後も、伊勢に出仕を促した真意という点においてである。宇多天皇が伊勢に再出仕を求めたのは、単なる職場への復帰という目的ではなく、新しく即位する第六十代天皇・醍醐という我が子への出仕、すなわち「召人」としての再出仕だったのである。これこそ王昭君の悲劇をプレテクストとして、大和初段の context（コンテクスト）の中に位置付けられた伊勢の運命だったのである。しかしながら、呼韓邪単于に嫁いだ王昭君が夫の死後、夫の実子に再び嫁いだという史実があるとはいえ、そうした匈奴の風習を漢代貴族は、決して許容しなかったはずである。それは、平安貴族も認めなかったのではないだろうか。何故なら、伊勢は、醍醐天皇の召人という運命を拒み、別の男性のもとへ去ったからであった。だとすれば、大和初段を「貞女再嫁」の構造で読み解きながらも、読者は、それを虚構方法と認定し、伊勢の再嫁という可能性を孕んでいた物語テクストの独自性を理解できたものと考えてよい、と思われる。

以上が文学テクストを読者自身が独自に解読するということの意義であり、それを本稿において試行し得た、と確認して筆を擱く次第である。

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

01・日本語文献

秋山（1994） 秋山虔・著・『伊勢』・ちくま学芸文庫・筑摩書房・1994年9月初版第一刷発行。

雨海（1983） 雨海博洋・編著・『大和物語諸注集成』・桜楓社・昭和五十八年五月初版発行。

石川（1989） 石川徹・校注・『大鏡』・新潮日本古典集成・新潮社・平成元年六月発行。

今井（1999） 今井源衛・著・『大和物語評釈・上巻』・笠間注釈叢刊27・笠間書院・平成十一年三月初版第一刷発行。

今井（2000） 今井源衛・著・『大和物語評釈・下巻』・笠間注釈叢刊28・笠間書院・平成十二年二月初版第一刷発行。

上原（1994） 上原作和・著・『光源氏物語の思想史的変貌―〈琴〉のゆくへ』・有精堂・1994年12月初版第一刷発行。

大野・他（1974） 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎・編・『岩波古語辞典』・岩波書店・1974年12月第一刷発行。

川村（2002） 川村裕子・「『蜻蛉日記』本文の再検討」（『中古文学』・第六十九号・中古文学会・平成十四年五月発行）。

工藤（2002） 工藤重矩・「蜻蛉日記天禄二年条本文改訂試案―「三／十夜なん通へる」の解釈を離れて―」（『中古文学』・第七十号・中古文学会・平成十四年十一月発行）。

小森（1995,1991） 小森陽一・「テクスト」

小森（1995,1991）小森陽一・「読者」（以上、どちらも石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織・著・『読むための理論―文学・思想・批評』・世織書房・1995年5月第七刷発行・1991年6月第一刷発行）。

臺灣大學學術期刊資料庫

佐藤（1996,1992）　佐藤信夫・著・『レトリック認識』・講談社学術文庫・講談社・1996年12月第七刷発行・1992年9月第一刷発行。

齋藤（2002）　齋藤奈美・「『長恨歌、王昭君などやうなる絵は』—絵合巻の引用と秋好中宮—」（『中古文学』・第六十九号・中古文学会・平成十四年五月発行）。

島村（1995,1991）　島村輝・「自由と権力」（石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織・著・『読むための理論—文学・思想・批評』・世織書房・1995年5月第七刷発行・1991年6月第一刷発行）。

「新編国歌大観」編集委員会（1983）　「新編国歌大観」編集委員会・編・『新編国歌大観・第一巻・勅撰集編・歌集』・角川書店・昭和五十八年二月初版発行。

鈴木・他（1998）　鈴木日出男・小島孝之・多田一臣・長島弘明・著・『古典入門・古文解釈の方法と実際』・筑摩書房・1998年5月初版第一刷発行。

高橋（1995,1991）　高橋修・「引用」（石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織・著・『読むための理論—文学・思想・批評』・世織書房・1995年5月第七刷発行・1991年6月第一刷発行）。

高橋（1972）　高橋正治・校注・訳・「大和物語」（片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子・校注・訳・『竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』・日本古典文学全集8・小学館・昭和四十七年十二月初版第一刷発行）。

平野（1994）　平野由紀子・校注・「伊勢集」（犬養廉・後藤祥子・平野由紀子・校注・『平安私家集』・新日本古典文学大系28・岩波書店・1994年12月第一刷発行）。

本多（1980）　本多伊平・著・『大和物語本文の研究・対校篇』・テキスト版・笠間書院・1980年2月初版発行。

山田（1989）　山田勝久・「王昭君に於ける史実と虚構性の系

臺灣大學學術期刊資料庫

譜について」(『語文』・北海道教育大学語学文学会・1989年3月発行)。

02・中国語文献

『漢書』・第十一冊・中華書局。

臺灣大學學術期刊資料庫